

寺院と公共性

お寺を支える仕組み ②

お寺と地域の「共にする」活動

前回の『宗報』（三月号）では、滋賀教区のお寺について、ソーシャル・キャピタル（社会関係資本）の視点から、どのように「うちのお寺」意識が生まれ、お寺とご門徒との「つながり」が育まれているのかということについて、報告しました。

今回は、「お寺の信頼はどのように生まれるのか」という問いのもと、お寺と地域（ご門徒）の「共にする」活動について、お寺の「兼業」の問題にも注視しつつ、レポートしたいと思います。

●お寺の「信頼」とは

さて、お寺が「人びとの集う空間」であるためには、何が必要でしょうか。さまざまな事柄が考えられますが、最も不可欠なものとして、お寺に対する「信頼」が挙げられるでしょう。人びとは「信頼」のない場所や空間に集まろうとはしません。それは、お寺にも当てはまります。どんなに清掃が行き届き、お荘厳が整えられ、法味豊かな取り組みが行われていても、お寺そのものに「信頼」がなけ

れば、人は集まりません。

実はこの「信頼」こそが、ソーシャル・キャピタル（社会関係資本）を語る上で、欠かせないキーワードでもあります。

「信頼」とは、「この人を信頼している」「あの人たちは信頼しあっている」などと使用されるように、私と他者、他者と他者を結びつける心のはたらきのことをいいます。

親鸞聖人もお示しのとおり、私たち人間は、他者に対して疑いや妬み、嫉みを持つ存在です。それは同時に、他者もまた、私自身をそのような存在として認識しがちであるということを意味します。疑いあう関係性の中に、継続的な「つながり」は生まれません。そこで私たちは、こうした「疑い」などの心を他者が自分に対して抱かないよう、つまり「信頼される存在」であろうと行動します。しかし、他者を阻害する意識はなかなか拭いがたい感情でもあるので、「信頼」がただつよう継続的に努力しなければならな

いという面があります。

では、お寺はどういう取り組みを通して、ご門徒や地域住民との「信頼」を築いているのでしょうか。滋賀調査の結果から浮き彫りとなったのは、お寺と地域の「共にする」活動が、お寺の「信頼」を生む大きな要素となっていることでした。

●お寺と地域の「共にする」活動

ソーシャル・キャピタル研究の第一人者・ロバート・パットナムは、社会関係資本が指し示すのは、社会的なつながりのネットワークであり、すなわち「共にする」ことである。

（パットナム著 柴内康文訳『孤独なボウリング』一三五頁）

と示します。パットナムは、誰かの「ためにする」行為と誰かと「共にする」行為を区別し、他者との「協働」（共にする行為）があつてこそソーシャル・キャピタルだと述べています。例えば、お

寺に來られた客人にお茶をふるまうことは「〇〇さんのために」という行為になりますが、法要の際にふるまうお齋を仏婦の人と一緒にすることは、仏婦の人と「共にする」行為となります。パットナムは、「共にする」ことがなければ、本当につながっていることにはならないと指摘しているのです。

滋賀教区では、寺族による積極的な地域コミュニティへの社会参加（民生委員、人権擁護委員、自治会活動など）が見られます。これは、まさしくお寺と地域住民との「共にする」活動に該当します。お寺の外の活動に参加することで、「共にする」関係が生まれているのです。この「共にする」活動が地域での「信頼」を醸成していることも調査から明らかになりました。「民生委員をやっている、その仲間とつながりができ、地域で信用してもらえようになつた」「地域のひとと一緒に清掃をしたり、懇親会で交流を持ったりしたことがお寺の信頼につながっている」といったご住職や坊主さんの

●「兼業」の実態

語りから、地域の人と目的を共有し、共に活動することが、お寺に対する信頼形成へと実を結んでいることがわかります。

着目すべきは、「共にする」ことと「兼業」がつながっている点です。

滋賀教区のお寺は、住職・寺族の兼業率が八割九割と言われています。事実、調査先の多くのご住職が「この地域に兼業は不可欠だ」と述べられました。この状況の中で、滋賀教区のお寺は、地域とのつながりを密に寺院活動を展開しています。では、こうした兼業のお寺にはどのような「信頼」が形成され育まれているのでしょうか。

ご住職の兼業先は、別寺院での法務、本山や教務所・別院などの宗務機関、保育園の経営や小中学校の教員、市役所などの行政機関や一般企業など、多種多様です。また、もともとは兼業であったが、

今は退職し年金を受けとりながら寺院運営をされているご住職もおられました。こうした方がたと地域との関係は結束の強いケースが多く見られます。お寺のある地域で兼業されている場合、地域の役員をされている場合と同様、お寺の外で関係が作られているものと見ることができまます。同地域で兼業されていた場合、退職後も継続的に地域活動に参画されているケースが多いという特徴も指摘でき、兼業と地域コミュニティへの参加には関連性が見出せます。

さて、兼業をされている住職世帯の生活状況については、「厳しい」との声が多い一方で、「ご門徒も気をつかってくれる」といった声も聞かれました。また、ご門徒からも「うちの住職は頑張っているから、私らも（お寺の活動を）やらな」という語りが多くありました。これらの発言は、ご門徒が住職世帯の生活状況がある程度把握されて、ご住職もそれを認識しているから出てきた語りだと思われまます。

ご門徒や地域住民にも、「うちのお寺は兼業するのが当たり前」という理解が浸透しています。これらの語りから、お寺をサポートしようという意識がご門徒にも生まれていると見ることもできるでしょう。「兼業」している住職の苦勞している姿などがご門徒に把握されていることよって、地域住民のお寺に対する理解が得られていると考えることができまます。

のでしょうか。事例を一つ紹介します。会社勤めを経験された後、お寺で経営する保育園を運営しながら、地域のサッカー活動に熱心に携わること住職がいっしょになりました。地域で行われる夏祭りの際には、お寺の保育園児たちが江州音頭を披露するなどして盛り上げるそうです。その卒園生の多くは、月に二回行われる日曜学校に参加したり、除夜の鐘に訪れたりするなど、お寺との関係が継続されています。また、住職が所属する社会人サッカークラブの関係者がお寺の総代になるなど、サッカー活動によるつながりもお寺の中に広がっていました。サッカークラブのつながりから総代になったご門徒は、「お寺の灯を絶やさないように、なんとかつなげて欲しいと皆に声をかけているんだ」とお話しくださったように、精力的にお寺の活動に携わっておられます。

また、前回報告したご門徒による寺院護持会計の管理やお寺の実務を担当する「年番」などは、住職や寺族の「兼業」をサポートすることにもなっています。つまり、滋賀教区のお寺の「兼業」は、地域の人の支えによって成り立つお寺と地域の「共にする」活動といえるでしょう。

このように、保育園やサッカー活動で得たご住職の経験やつながりが、お寺の中に取り込まれ新たなつながりを生み出

●兼業がもたらすもの

では、このような地域のお寺では、具体的にどのような活動が展開されている僧侶の信頼となり、お寺の活性化に結びついているという点では、兼業と共通する特徴を見ることができまます。兼業がもたらす地域とのつながりの可能性の一例として紹介しまました。

●さごころに

今回は、お寺と地域が「共にする」活動をすること、お寺に対する「信頼」が育まれていることを確認しまました。また、住職が兼業しながらのお寺の活動には、地域住民が理解し支えあい、さらに、住職が外で得たつながりや経験が地域に還元されていることが明らかとなりまました。これらの事柄は、相互に響きあい、絡みあいながら、お寺に対する「信頼」を形成してしまました。

お寺の外の活動からつながり、お寺の役員となった方ですが、お寺の今後を見据えて、まさにご自身のこととして精力的に活動されています。このように、お寺と関係のなかつた人との接点を持つことで、お寺の活動の裾野を広げる取り組みが展開されているのです。こうした例は、課題をお寺の外側と「共有」し、課題への取り組みを「共にする」ものと評価できまます。

サッカー活動や兼業などは、一見、お寺とは無関係に思える活動ですが、そこから得たつながりや経験・知識がお寺の「信頼」となって、お寺本来の活動を充実させています。先ほどの総代さんは、

一層多くなる兼業について、悲観的に見るだけでなく、「お寺の外側との接続」[僧侶への信頼の契機]「ネットワークの構築」[地域の課題の共有]と兼業を捉え直していくことが、大切ではないでしょうか。

この事例は「兼業」のお寺とはやや異なりますが、お寺の外の活動が、お寺や

(浄土真宗本願寺派総合研究所 那須公昭)